

令和5年度 第1回 多職種連携つなぐカフェ【ご報告】

【日時】令和5年6月20日(火) 15:00~16:30

【会場】マルホンまきあーとテラス2階 大研修室

【内容】

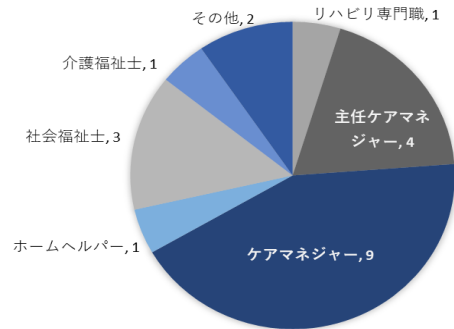
- (1) 講話
「認知症に対するリハビリテーションについて」
- (2) フリートーク
「認知症の方に対する在宅生活の支援について考えよう」

【講師】

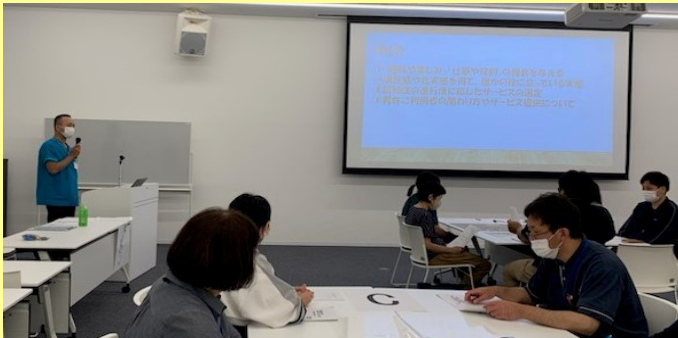
医療法人社団健育会 介護老人保健施設しおん
リハビリテーション課長 佐藤 祐一 氏

参加者の職種(人数)

※参加者24名中、アンケート回答者21名



<参加風景>



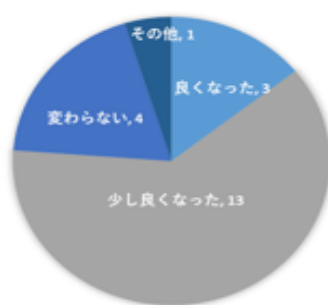
講話後は、フリートークの時間を設け、参加者が普段、悩んでいること等をざっくばらんに話し合いました。認知症の方への対応について、うまくいった方法についても共有し、「その手があったか!」「皆さんのアプローチの仕方が参考になった」等の感想が聞かれました。

<アンケート結果(n=21)>

【参加していかがでしたか】



【以前より多職種との連携がスムーズになったと感じますか】



<感想>

- 徐々に顔が見える交流ができて、楽しかった。
- 多職種の方と意見交換し、デイサービスのスタッフさんの意見、理学療法士の意見等たくさん聞かせていただき、職種が、違うと様々な見方があると実感した。
- 認知症の予防には運動・食事・生きがいがづくり(自分の役割を持つ事)が大きく関わっている事が再確認できた。
- 現場で利用者と関わっている方が講師だったので、現場の生の声が聞けて良かった。
- 認知症高齢者に対するアプローチを考えており、非常に為になった。

みなさんのお悩み・思い

<p>認知症によって在宅生活が続けられず、施設入所となる方が多い</p>	<p>作業やリハへの意欲が低い(ようにみえてしまう)方への対応に悩む</p>	<p>リハビリがうまくいく条件として、認知状態も関わってくると思う</p> <p>重度になってくると、リハビリのゴール設定が難しい</p>
<p>同職種で、認知症に対する悩みは同じであり、またその悩みに対する解決策も決まっていないことを痛感した</p> <p>多職種と話す中で気づくことがたくさんあった</p>	<p>本当にご利用者にとって必要な支援は何か？</p> <p>→状態の変化によっては、「慣れた事業所」にこだわらず、別な支援の提案が必要なこともあるのではないか</p>	<p>手先の作業をよくする方は認知症になりづらいように思う</p>
<p>男性の認知症の方への対応は難しい(女性は、一緒にできる家事や作業がみつやすい)</p>	<p>認知症の方のリハビリは、目的が明確でないと効果が薄い</p> <p>家族の希望で行っているケースもあるが、本人はどう思っているのか悩ましい</p>	<p>「改善」に対する家族の理解も必要</p> <p>認知症の方々への作業・レクを全体で行うのは、実際のところ難しい</p>

うまくいった対応・声かけなど

- 本人の追憶に働きかける(回想法)
- その方の好きな活動の提案
- 地域の協力を得て、元々していた役員としての役割を担っている実感をもっていただく
- 認知度に合わせたサービス、その方に合わせた内容の会話
- 本人の思いを明確にしていく。自分ができなくなったら困るところにポイントをおく
時には、本人が困るまで待つことも大切
- タクシー運転手だった方には、「夜勤」、農家の方には「草取り」など、仕事と紐づいたキーワードを用いて次の行動を促したり会話したりする
- 「ありがとう」「助かる」の言葉かけと、「教えてもらう」姿勢を大切にする
- 趣味をいかす(つくる喜びと、あげる楽しみ)
- カメラが趣味だった方が、次から次へとラジオを分解して壊してしまったことがある
→ 困った行動ではあったが、発想を転換し、今度はその部品を使って「ラジオを作る」ことを提案したところ、本人が意欲をもって作業することに繋がった